

「男、突っ走る！」

第52回

第一稿

作・壽倉 雅

1 名古屋芸術専門学校・1階・ロビー

(夕)

明美が待っている——エレベーターが開き、雅也が出てくる。

雅也「お待たせ」

明美「よし、行きますか！」

2 鶴舞公園(夜)

花見客で賑わっている——ベンチに座って、クレープを食べている雅也と明美。

雅也「ゆっくり花見なんてしたの、初めてかもしれない」

明美「私も、花見行く相手いませんから」

雅也「そういう寂しいこと言いなさんな」

明美「先輩は、たくさん友達いますもんね」

雅也「まあ、ありがたいことに友人関係には恵まれてるかな」

明美「あ、先輩」

雅也「どうした？」

明美「夏になったら、ビアガーデン行きませんか？」

雅也「もう夏の話？」

明美「行きましようよ」

雅也「ビアガーデンなんて行ったことないもんな。せつかくだし、行ってみるか」

明美「やったー！」

雅也「明美ちゃんは、イベントが好きなんだね」

明美「だって楽しいじゃないですか。それに、アパートで一人にいるのもつまらないですからね」

雅也「明美ちゃん、今一人暮らしだったね」
明美「そうなんです。一人はつまらないですよ。学校にいたほうが、よっぽど楽しいです。それに、卒業まで一年もないですからね。ラストイヤーは思い切り楽しもうと思っ

雅也「あ、そっか。明美ちゃんのほうの学校は二年課程だったね。じゃあ、卒業は俺た

ちと一緒ってわけだ」

明美「先輩と卒業するっていうのも、何だか不思議ですね」

雅也「確かに。同じ年に入学した、明美ちゃんたちの先輩は、この三月で卒業しちゃったもんね」

明美「先月、動物の学校と私たちの学校と木内先輩の学校の三学科の学生で、焼肉たべにいきましたよね。ああいう時間も、私にとっては貴重ですよ。先輩のつながりがなかったら、三学科合同でご飯食べることなんてないですもん」

雅也「うちの鈴島事務局長も驚いてた。三学科で集まるご飯会なんて、これまでなかったって」

明美「先輩の繋がりますよ」

雅也「焼肉食べたとき、俺が幹事で予約したじゃん。コースで予約したけどさ、まさか俺以外ホルモン食べれないなんて誰も思わないじゃん」

明美「よくホルモン食べきりましたね」

雅也「アゴ痛かったよ。俺が無言でホルモン食べてる様子みて、中には泣き笑いする奴だっっていたんだから」

明美「持ってますよ、先輩は」

雅也「今年も、三学科で飲み会やろうかな」

明美「良いっすね、やりましょう」

雅也「進路決めなきゃいけないけど、やっぱりそういう楽しい時間も作らないとね。お互い、最後の一年なんだから」

明美「ですね」

雅也「うん」

明美「先輩、写真撮りましょう」

雅也「良いよ」

明美、スマホを取り出して、夜桜を背景に雅也と自撮りをする。

雅也「後で写真送っというて」

明美「はい」

4 同・4階・廊下

エレベーターが開き、雅也が入ってくる――ベンチに座っている篤志、裕司、拓海、和也が一斉に振り向き、雅也を見る。

雅也「どうしたの？ 俺の顔に何かついてる？ おかしな顔してる？」

篤志「うちーも、罪深いかなあ」

雅也「何が？」

和也「うちー、製菓の本部さんのSNS見てないの？」

雅也「え？」

拓海「気づいてないみたいだな」

裕司「（和也に）やつすー、さっきのうちーに見せてあげたら」

雅也「……？」

和也「これだよ」

と、雅也にスマホを見せる――雅也、スマホの画面を見る。

明美のSNSの画面——雅也との自撮りがアップされている。

雅也「（読み上げて）『大好きなうちー先輩と、昨日お花見に行ってきた』。これが、どうかしたの？」

裕司「大好きって書いてあるじゃん」

雅也「いや、これはさ、英語における『LIKE』の意味での好きってわけであってさ、別に付き合ってるわけじゃないんだから」

拓海「本当に『LIKE』なの？」

雅也「だって、別に告白されたわけじゃないし、明美ちゃんは仲の良い後輩なんだから」

篤志「仲が良いからって、『大好きな』ってつけるかな。しかも、最後にハートマークなんてついてるし」

雅也「仲が良かったら、ハートマークつけるもんでしょ」

篤志・裕司・拓海・和也「いやいやいやいや」
雅也「本当だって。やめようよ、余計な詮索するの。本当に、明美ちゃんとは何も無い」

んだから」

篤志「うっちー。進展したかったら、いつでも相談乗るぞ」

雅也「あつぽん……」

拓海「まあ、うっちーのことだ。大事な仲の良い後輩ってことにしておこうよ」

雅也「ぐっち、しておこうじゃないのよ、本当に仲の良い後輩なの」

拓海「はいはい」

雅也、膨れっ面になる——その頬を押す裕司と和也。

5 居酒屋『とんちゃん』（夜）

雅也と瑞枝がやってくる。

雅也「ここが、うちの両親が昔から行ってたお店」

瑞枝「へえ」

雅也「とにかく、焼き鳥とか串ものが美味しいの」

瑞枝「お腹ペコペコにして良かった」

雅也「同じく」

と、ドアを開けて瑞枝と共に入る。

カウンター席が十席ほどと、座敷席が

三つのこじんまりとした店舗。

カウンターで大将が焼き鳥を焼いてお

り、若女将が接客をしている。

若女将「いらっしやい」

雅也「こんばんは」

若女将「あら、今日のご家族と一緒に

の？」

雅也「今日は、専門学校の友達と一緒に」

瑞枝「こんばんは」

若女将「彼女さん？」

雅也「（慌てて）そんなんじゃないですよ」

若女将「こちらどうぞ」

カウンター席に座る雅也と瑞枝。

若女将「何にしましょう？」

雅也「（瑞枝に）とりあえずビールで良い？」

瑞枝「うん」

雅也「じゃあ生中二つと、ねぎまと鶏皮と二

本ずつお願いします」

若女将「（伝票を書きながら）ねぎま、皮二本ずつ」

大将「はいよー」

と、炭火で焼き始める。

×

×

×

ビールを飲みながら話している雅也と

瑞枝。

瑞枝「そりや災難だったね」

雅也「まあ、向こうも悪気があったわけじゃないからね。現に仲の良いことは事実なわけだし」

瑞枝「そっか」

と、若女将が皿に乗った揚げ物を運んでくる。

若女将「はい、上串ね」

雅也「ありがとうございます」

瑞枝「何これ？」

雅也「上串って言ってね、ねぎまを衣で揚げてるの。ここの名物で、うちの親もこれが

大好きでね」

瑞枝「へえ。いただきます（と食べる）」

雅也「どう？」

瑞枝「美味しいッ」

雅也「でしょ。俺も、ここに来たら絶対これ

食べるの（と食べ始める）」

瑞枝「みんなも連れてきたいね」

雅也「そうだね」

と、雅也のスマホに着信が来る——浩平からである。

雅也「眞榮田からだ。（と電話に出て）もし

もし？ あ、ごめん。もう帰っちゃった。

今？ 今ね、みずちゃんと一緒に飲んでる。

そうそう、途中下車したの。定期区間だっ

たからさ。うん……うん……え、俺は別に

良いけど。うん、あちよつと待ってね。

（と瑞枝に）ねえ、眞榮田がさ、熱田神宮

一緒に行かないかって言ってる。新学期始

まって、進路が無事に決まるようにお祈り

に行きたいって」

瑞枝「良いね。私はOKよ」

雅也「（電話に）あ、もしもし。みずちゃんも良いって言ってる。うん、分かった。じやあ、また学校で予定決めよう。はいはい、今度連れてってあげるから。はいはい、じやあね。（と電話を切ると）二人でズルいつて言われちゃった」

瑞枝「眞榮田、学校に戻ったの？」

雅也「まあバイト先のテレビ局は、学校からすぐだもんね。何か用事があったり、バイト終わったら、そのまま自習もできるでしょ」

瑞枝「ねえ、これもう一本食べて良い？」

雅也「どうぞどうぞ」

瑞枝「やったね（と串を食べる）」

笑ってその様子を見ている雅也。

6 熱田神宮・表（数日後）

参拝者が参列している。

7 同・境内前

雅也、浩平、瑞枝が歩いている――賽
錢箱に小錢を入れて、それぞれ手を合
わせる。

8 同・社務所前

おみくじの紙を見ている雅也、浩平、
瑞枝。

浩平「よっしや、大吉！」

瑞枝「私、中吉」

雅也「俺、吉……」

9 ファミレス・全景（夜）

10 同・店内

雅也、浩平、瑞枝が話している。

雅也「進路、早く決まると良いけどねえ」

瑞枝「まあ、必ずしも早く決まれば良いって
わけないじゃないけどね。ギリギリになっ
てでも、ちゃんと自分が働ける環境を見つ

けるほうが良いと思う」

雅也「眞榮田は、今のバイト先にするの？」

浩平「その予定でいる」

雅也「みずちゃんは？ 去年、東京でインタ

ーン受けた会社？」

瑞枝「うーん……まだ確定ではないけどね」

雅也「俺は、CGとかは専門外だから分かんないけど、やっぱり会社によって違うの？」

瑞枝「モデリングとかのCGもあるし、ゲームやアニメもCGもあるからね。その中で、どういう方向性で行くのかも、まだ正直曖昧なの」

雅也「そっか……」

浩平「焦ることはないって。まだ時間はあるんだから」

瑞枝「それは言えてるかも」

雅也「焦ったら、ロクなことないもんね」

浩平「まあ、後は急かしてくるキャリアセンターをどう対処するかだけだ」

雅也「実績のために急かしてくるって、先輩

から聞いたことある」

瑞枝「今年からキャリアセンターの担当者が
変わったじゃん。あまり業界のこと分かっ
てないんじゃないかな。私、どうも信用で
きない」

雅也「そんな人に急かされてもねえ」

浩平「まあ、俺たちはいつもどおりにやれば
良いんだよ。残り一年、楽しまなきゃ」

雅也「それは言ってる」

瑞枝「あのさ……」

雅也「どうしたの？」

瑞枝「こんなところで言うことじゃないと思

うんだけど……」

浩平「何？」

瑞枝「私さ……イラスト専攻の梶山君と付き
合ってる」

唾然と瑞枝を見る雅也と浩平。

浩平「マジか……」

雅也「……」

瑞枝「うん」

浩平「梶山って、前も漫画専攻の子と付き合い
ってなかったか？」

瑞枝「あの子とは、もうとっくの前に別れた
よ」

雅也「どうしてうちらって、身内で相手見つ
けようとするんだらうね」

浩平「…：反論できない」

雅也「まあ、出会いの場がないもんね。よっ
ぽどバイトとか、他でも人と会う環境にい
れば話は別だけど」

浩平「このこと、他には…：？」

瑞枝「多分、何となく同期の中では気づいて
る子いるんじゃないかな」

雅也「…：」

浩平「いつまで続くかね」

瑞枝「何か、眞榮田に言われると、説得力が
あるというか」

浩平「おい…：」

雅也「こういう時は、おめでとうって言えば
良いのかな」

瑞枝「多分……」

雅也「何組のカップルが誕生して、何組のカップルが別れてきたか。せめてみずちゃんには、幸せになって欲しいな」

瑞枝「ありがとう」

浩平「……」

複雑な顔の雅也。

11 『スクエア・トラスト』・事務所（数

日後）

安本が仕事をしている——ファイル整理をしている雅也。

雅也「バックナンバーのファイリング終わりました」

安本「ご苦労様。今日はもう上がって良いわよ」

雅也「ありがとうございます」

安本「連載小説、結構好評なのよ」

雅也「本当ですか？」

安本「やっぱり、ターゲット層に合わせて、

ビジネスマンを主人公にしたっていうのが
良かったのかもしれないわね。この間、取
引先の人に、『この主人公の人に、モデル
はいるんですか？』って聞かれたわ」

雅也「何て答えたんですか？」

安本「営業マン一人ひとりがモデルですって、
答えといたわ」

雅也「まあ、あながち間違っちゃいないです
ね」

安本「配布エリアも増えてきて、これからも
つと木内君の作品が世に出ると思うわ。頑
張ってね」

雅也「はいッ」

12 名古屋芸術専門学校・全景

13 同・4階・廊下

雅也、瑞枝、夏美がドーナツを食べて
いる。

夏美「あ、見たよ。うちのフリーペーパー

」

雅也「ありがとう」

瑞枝「ああ、二階の教務室前のチラシ置きの中にあつたよね。私もいつも見てる」

雅也「読者がいるっていうのは嬉しいね。これからも連載頑張らなきゃ」

と、吉野が階段を上がってくると、

吉野「あ、木内君。この後、時間ある？ 鈴

島事務局長が、話があるって」

雅也「え、鈴島局長が？」

吉野「そうなの」

雅也「五時以降なら、授業もないので大丈夫だと思いますけど」

吉野「ありがとう。じゃあ、六時に二階のカウンセリングルームで」

雅也「分かりました」

去っていく吉野。

瑞枝「鈴島局長から呼ばれるって、うちー何やったの？」

雅也「（不思議そうに）分かんない」

14 同・2階・カウンセリングルーム

雅也がノックをして入ってくる。

雅也「失礼します」

吉野と鈴島が迎える。

鈴島「ごめんね木内君。突然呼び出して」

雅也「いえ」

吉野「実はね、木内君にお仕事の依頼をした
くて来てもらったの」

雅也「仕事ですか？」

吉野「木内君も高校の時、うちの学校の資料
請求してくれましたよ。その時、パンフレ
ット以外にも学校のチラシとか奨学金の資
料とかいろんなものを同封してるんだけど、
今回から新しく学校新聞っていうのを作っ
て、それも資料として使おうと思ってるの」

雅也「はあ」

鈴島「木内君が『なご弁新聞』の記事や連載
小説を書いているのを、私も見させてもらっ
てピンと来たんだよ。学校新聞の記事を、

木内君に書いてもらえないかって」

雅也「え……僕がですか？」

鈴木「一面記事は、発行のタイミングから見て学園祭のイベント記事みたいにしようと思ってる。姉妹校にも繋がり深い木内君なら、学園祭当日いろんなところに回って取材してもらえれば、良い記事になると思ってるね」

吉野「実績にもなると思うの。ぜひ、やってみてない？」

雅也「はい……よろしくお願いします」

嬉しそうに頭を下げる雅也。

つづく